

〔書評〕

谷口 貢

## 坂本要『民間念仏信仰の研究』

本書は、著者の坂本要氏がライフ・ワークとして取り組んだ「民間念仏信仰」の追究を、徹底した実地調査に基づいてまとめた研究成果である。本書の基礎をなす関連論考群は、初出論文一覧をみると、一九八〇年から二〇一六年までに雑誌・報告書等に発表された三三本で構成されており、実に三七年間以上の長きにわたる持続的な研究の蓄積によるもので、初出論考の多くは改稿が施されている。また、巻末に示されている調査地一覧では、北海道から九州までの三四の都道府県に及び、全部で五八六カ所が挙げられている。本書は全国を俯瞰しようとした研究であり、総数八六〇頁にも及ぶ大部の労作である。

著者は、一九七三年に仏教民俗研究会を立ち上げてから二〇〇八年まで一六六回の研究会を重ねるとともに、雑誌『仏教民俗研究』（不定期で第七号まで刊行）を発行するな

ど、「仏教民俗」の研究を独自の立場から牽引してきた一人である。著者の「仏教民俗」の捉え方は、本書に結実した「民間念仏信仰」の研究の進展とともに深化してきたといえる。一九八六年に発表した論考「日本的仏教と仏教民俗」（『歴史手帖』第一四巻第一〇号）では、研究史を整理した上で、文化人類学の中牧弘允氏が『神々の相克―文化接触と土着主義―』（中牧弘允編、新泉社、一九八二）などで提起した、日本宗教の多様な混濁を「普遍主義的宗教（仏教・儒教・キリスト教等）」、「土着的宗教（民間信仰）」、「土着主義的宗教（神道）」の三極構造で把握しようとする試みに賛同している。<sup>②</sup>しかし、この時点では、著者を含め

て「普遍主義的宗教（仏教）」とは異なる土着主義的仏教（日本的仏教）の成立を確定する作業はまだできていない<sup>③</sup>とされている。二〇〇八年発表の「日本的念仏と三円構造」（『宗

教民俗研究』第一八号）では、中牧氏の議論を踏まえて「民俗」と「仏教」と「仏教民俗」の三円構造で捉え、「仏教民俗」を歴史的経過からみるとこれが仏教の要素でこれが民俗の要素であるとその習合過程を追跡できるものの、「現象としてあるのは仏教民俗として独自の体系をもつものである」と主張している。<sup>④</sup>つまり、「仏教民俗」を動態的に捉えると、「仏教」と「民俗」が接触して「仏教民俗」という独自の体系をもつ日本の宗教が展開しているのだとしている。著者の視座は、仏教的要素を取り除けば日本固有の信仰が抽出できるとする起源論に結び付く研究や、仏教や仏教史研究の欠落している部分を補完するという立場の研究などと一線を画そうとする意図が込められている。さらに、二〇一九年発表の「『仏教民俗研究会』前後」（『佛

教経済研究』第四八号）では、「筆者の研究する民間念仏も浄土教の念仏と声を含む身体的呪術性との融合とで生まれた日本的念仏と言える」とし、この「日本的念仏」を「独立した実態として捉えることが研究の出発点<sup>⑤</sup>」であると明言している。

前置きが長くなったが、本書の章立ては全七章で構成されており、章・節の目次を示すと以下の通りである。

〈目次〉

はじめに

第一章 民間念仏の系譜

第一節 民間念仏の系譜

第二節 踊り念仏の種々相

第二章 融通念仏と講仏教

第一節 融通念仏と大念仏

第二節 知多半島の虫供養大念仏と講仏教

第三章 六斎念仏の地方伝播

第一節 全国の六斎念仏

第二節 奈良県の六斎念仏

第三節 若狭の六斎と念仏

第四節 平戸・壱岐の六斎念仏

第五節 富士山周辺の祈祷六斎念仏

第四章 双盤念仏―芸能化された声明―

第一節 双盤念仏の概要

第二節 神奈川県の双盤念仏（付 千葉県）

第三節 東京都の双盤念仏

第四節 埼玉県の双盤念仏

第五節 関西の双盤念仏（付 岡山県・鳥取県）

第六節 善光寺と名越派の双盤念仏

第七節 双盤念仏の成立と変遷

第八節 双盤念仏資料

第五章 大念仏と風流踊り―念仏踊りの二部構成―

第一節 三遠信国境地区と周辺の大念仏芸能の概観

第二節 南信州の念仏踊り・掛け踊り

第三節 水窪大念仏と五方念仏

第四節 三遠信太念仏の構成と所作

―三河地区を中心に―

第五節 奈良県十津川村の大踊りから見た盆風流

第六章 傘ブクと吊り下げ物

第一節 伊勢・志摩大念仏と傘ブク

第二節 傘ブクと送魂儀礼

第七章 まとめ

「はじめに」では、本書の研究が一九六六年に刊行された『民間念仏信仰の研究 資料編』（佛教大学民間念仏研究会編、隆文館）を受け継いだもので、書名もそれに準じたとしている。この資料編は、科研費の助成を得て行われた共同研究で、紹介調査・文献調査・実地調査を併用して、

る。古代から近世までの流れを押さえた「民間念仏略年表」が掲載されている。

「第二章 融通念仏と講仏教」では、融通念仏について概説し、融通念仏から変化したとみられる愛知県の知多半島一帯で行われている「虫供養大念仏」行事を取り上げている。融通念仏は、融通念仏宗の開祖・良忍（一〇七二―一一三二）が阿弥陀仏の夢告によって感得したとされる、自分の唱える念仏の功德は一切の人に融通し、他人の唱える念仏は無限の念仏となつて往生が成し遂げられるという教えに基づいて広められた念仏である。この融通念仏は、大勢で念仏を唱える法会を実践する講的仏教として展開した運動であり、宗派のかたちをとらず勸進聖・念仏聖などの活動によって民間に普及した。融通念仏宗が宗派の形態を整えるのは近世に入ってからであり、大念仏宗などともいわれ、融通念仏宗の宗名を公称するのは明治初頭のことである。融通念仏は多人数が参加して行うことから大念仏ともいわれ、念仏の合唱のようなものであった。民俗芸能でいわれる「大念仏」は、踊りを伴う風流系念仏踊りを指す場合が多く、踊りの前に引声系の念仏が唱えられることから一般名詞の大掛かりな念仏の意味で用いられるように

民間念仏の全国的な実態を把握しようとした資料集である。資料編の序文には、研究編の刊行が予告されていたが、それは果たされなかった<sup>(6)</sup>。しかし、民間念仏信仰の研究編は、共同研究のメンバーの一人であった五来重氏によって担われたといえる。五来氏の「融通念仏・大念仏および六斎念仏」（『大谷大学研究年報』第一〇号、一九五七）及び一九六二年の学位主論文の『日本仏教民俗学論攷』（五来重著作集第一巻、法蔵館、二〇〇七、この論文は未刊で著作集にはじめて収録）等々である<sup>(7)</sup>。坂本要氏の研究は、半世紀以上前に刊行された『民間念仏信仰の研究 資料編』の研究編を目指すとともに、徹底した実地調査によって、五来氏の研究を乗り越え、新たな知見を切り拓こうとするものといえる。

「第一章 民間念仏の系譜」では、まず「民間念仏」を「僧侶が主催しない、在俗の人のみで行う念仏」であると捉え、この民間念仏を大別すると、唱えを主にした融通念仏（百万遍を含む）・六斎念仏・双盤念仏と、踊りを伴う踊り念仏・念仏踊りの二つに分けられるという。五来重氏の議論や仏教史・歴史学の最新の研究を踏まえながら、民間念仏の歴史的な変遷と空也・一遍などの念仏聖の系譜を概観している。

なつたものとみられる。各地の念仏踊りの多くは「念仏十踊り」の構成となっており、この念仏に当たる部分が融通念仏に淵源するものであるという。

虫供養大念仏が行われている知多半島は、融通念仏をはじめた良忍の生まれ故郷（東海市富木島町）でもあり、念仏信仰の盛んな地域である。虫供養大念仏は秋彼岸などに地区を巡回しながら大法要や道場供養を行うもので、伝承する地域集団は「一グループ」を数える。この行事は、江戸幕府の宗派別統制がはじまる以前に基本的なかたちが出来ていたもので、惣村連合のような村を越える大念仏が形成され、近世に入ると各宗派の影響を受け、さらに展開して規模も大きくなっていった。しかし、その一方で道場や巡回念仏などにおける「阿弥陀ぼんさん」のような在俗念仏者（俗聖・毛坊主）の活動がみられるのである。知多半島は、念仏信仰の種々相を伝えるとともに、近世初頭の民間念仏信仰の形態を色濃く残す地域として注目されるという。

「第三章 六斎念仏の地方伝播」では、一五世紀に高野山ではじまったとされる六斎念仏について概説し、各地の六斎念仏の実態を追究している。六斎念仏は、毎月六回の持齋日に行われた念仏で、唱えを中心とした地味なもので

ある。この持齋日には仏教の戒律を守り、特に正午を過ぎてものを食べないことを重視した。融通念仏が大念仏として広まり、それに歌舞が付随していくのに対して、六齋念仏はそれへの反動として起こった持齋の念仏で、引声念仏の流れをくむ「南無阿弥陀仏」を長々と伸ばす念仏であるという。「全国六齋念仏一覽」を掲げ、和歌山・京都・滋賀・兵庫・大阪・奈良・福井・高知・愛媛・長崎・山梨・静岡・神奈川・愛知の二府一二県に分布がみられることを示している。近畿に集中しているのは、六齋念仏が高野山や京都を中心にして展開したことと関係している。

本書では、六齋念仏の調査・研究が進んでいる近畿は奈良県の報告にとどめ、地方伝播の実態把握に努めている。若狭の悉皆調査から導き出された結論では、この地域の六齋念仏は、「六齋」と「念仏」は別であると考えたほうがよいとし、六齋には「引声系六齋」と「芸能六齋」の両様が見られることを指摘している。平戸・宍岐の六齋念仏は、著者が新たに見出したもので、これらの地域に古態を伝える六齋念仏がみられるのは、近世初頭にキリシタン禁制に伴う平戸藩の宗教政策で、念仏奨励などが盛んに行われた結果でまなかと、富士山周辺には、芸能化された六

齋念仏とは趣の異なった祈禱色の強い六齋念仏が伝えられている。著者は、これを「祈禱六齋念仏」として捉え、全部で三十六カ所にみられ、富士行者などの修験の関与が指摘できるといふ。

「第四章 双盤念仏」では、双盤念仏について概説し、全国の事例を網羅している。これまで双盤念仏の研究は少なく、本書によつてはじめて全体像が示されたといえる。双盤念仏は、一尺三寸ほどの大きな鉦を叩きながら引声念仏を唱えるもので、浄土宗において十夜法要などに行われる儀礼として成立し、それが民間に下降して芸能化の要素を強めていったものという。「双盤」の由来には、二枚鉦を叩くからという説と、二枚の鉦が双調と盤渉調を奏でるからという説とがある。実際に行われている双盤念仏には、一枚鉦、二枚鉦、三枚以上の多数鉦を並べるもの、さらに雲版を用いるものなどがあり、叩き方も多様である。著者は、引声念仏に双盤鉦が伴うようになるのは、中世まで溯ることが出来ず、いまのところ万治元年（一六五九）以前の双盤鉦を見出せないことから、近世前期ではないかと主張している。

びとの講や連中による双盤（民間双盤）がみられる。「双盤念仏一覽」では、都・道・二府・一七県の二九七カ所の確認出来る事例が示されている。分布の特徴としては、寺院双盤は北海道から九州までの各地に点在するが、民間双盤は関東と関西に集中しているという。神奈川県では鎌倉光明寺の双盤念仏が元で、この系統は東京都内にも広がった。東京都下では、八王寺大善寺の影響が強くみられる。

東京では、明治から大正にかけて双盤念仏が爆発的に流行し、いくつかの流派に分かれて技を競ったが、昭和の戦時体制の中で多くの団体が衰退してしまった。関西の双盤念仏（鉦講）については四一カ所の調査に基づいて、安土浄厳院（近江八幡市）に発する楷定念仏地区とその他の地区に分けている。前者は雲版と双盤鉦で唱える念仏で、滋賀県の湖南から甲賀一帯に広まっており、後者は少数ながら京都・奈良・和歌山・兵庫にみられるという。

著者は、全国的な視野から双盤念仏の歴史的経緯を仮説的に示している。双盤鉦は、伏せ鉦を大きくして横叩きしたもので、当初は一枚鉦で法要などの入退堂の合図鉦として用いられた。叩き方は、善光寺や浄土宗名越派の団体参詣時などでみられる「きざみ叩き」と共通していたのでは

ないかという。これが二枚鉦として念仏を伴い、浄土宗の十夜法要などの儀礼に取り入れられた。この二枚鉦は、元々役僧が叩いていたものであるが、後に在家の双盤講・鉦講の人びとが担うようになっていった。在家の人びとの双盤念仏（民間双盤）がはじまるのは、多数鉦が出てくる近世の享保年間（一七一六〜一七三六）頃ではないかという。

「第五章 大念仏と風流踊り」では、三遠信国境地域（天竜川中流域）に展開する風流系念仏踊りについて、約七〇カ所の調査に基づいて考察している。天竜川中流域は、花祭・霜月祭りなど民俗芸能の宝庫として知られるが、夏の行事に注目すると念仏踊り系の行事が色濃く分布している地域である。具体的には、長野県南部の掛け踊り、静岡県水窪町（現浜松市）の大念仏、愛知県側のハネコミ・放下の念仏踊りである。これに類した風流系の踊りとして、長野県のお練りや愛知県新城市の笹踊り、静岡県森町の傘づくなどがあり、これらは念仏踊りとの連続性が考えられる行事であるという。著者は、諸行事の詳細な比較と構成要素の分析を行って、この地域のいわゆる「念仏踊り」の構成は、踊りを伴わない引声系念仏（六齋念仏）と、踊りを伴う念仏踊りの部分に明確に分かれていることを指摘して

いる。しかも踊りを伴う念仏踊りといわれる部分においても、ナムアマダブツと唱える念仏で踊るものではないのだという。著者は、この問題提起を検証するために、風流踊りの古態を伝えるとされる奈良県十津川村の盆踊りの調査を行い、三信遠大念仏との比較考察をしている。その結果、十津川においても明治維新で廃仏毀釈が断行される前は「念仏」と「踊り」の二部構成になっていたのではないかと述べている。

「第六章 傘ブクと吊り下げ物」では、三重県の伊勢・志摩に広がる大念仏を取り上げ、この行事に出る「傘ブク」に注目している。傘ブクはもともと祭礼の依り代としての傘と鉾もしくは長刀鉾が習合したもので、傘鉾が訛って傘ブクといわれるようになったものという。この傘ブクに吊り下げ物を下げたものもみられる。志摩の大念仏では、盆行事に亡くなった人の遺品を傘ブクに下げて念仏を唱えている。著者は、各地の行事や近世の祭礼図の傘ブク・吊り下げ物を検討して、志摩の傘ブクは新亡の身に付いた災厄とともに魂を囃して送る送魂儀礼であるという。このように傘ブクの意味を明らかにした上で、伊勢・志摩の大念仏行事は、「大念仏十傘ブクの拍子物十風流踊り（カンコ踊

り）」の三部構成であり、カンコ踊りのないところでは「大念仏十傘ブク」の二部構成になっていると主張している。

「第七章 まとめ」では、本書全体のまとめを行い、「日本的念仏」に言及している。著者は、柳宗悦や鈴木大拙が唱えるという声を発する行為・行そのものに意味があるとした念仏観を評価し、身体性を強めた点が念仏の日本の展開もしくは日本の念仏であるという。著者が主張するように、念仏が身体性をもったとするならば、それは身体にとどまらず精神（心意）に対しても影響を及ぼしたのではないだろうか。また著者は、折口信夫が「言葉は音で聞く、文字では考えない」とし、非文字文化の追究を民俗学的研究の基本的な方法とした点を高く評価している。「日本的念仏」は、文字の「南無阿弥陀仏」ではなく、身体表現を伴う「ナムアマダブツ」という口称と踊りに収斂されたものであるという。著者が主張する「日本的念仏」の意味内容については、本書では荒削りにとどまっているので、今後の課題としてさらに彫琢されていくことを期待したい。

のような点があれば、ご海容願いたい。

本書では、融通念仏・六斎念仏・双盤念仏・念仏踊りをめぐって、新たな解釈や視点、行事の捉え方、問題提起などが多面的になされているので、とりわけ民俗芸能研究において実りある議論が展開されていくことを切望している。評者の関心からは、本書の「民間念仏信仰」の研究が民俗信仰の研究とどのように切り結ぶかということである。

評者の理解する「民俗信仰」（評者はこの語を積極的に用いている）とは、古代からの信仰が蓄積されてきているとともに、成立宗教（創唱宗教）との接触・交渉や社会の変動などを通して変化・変容を遂げながらも、人びとの社会生活を基盤として発現する宗教（信仰）現象である<sup>8)</sup>。信仰の蓄積があるということは、民俗信仰はある程度の基層性をもっているといえる。また、民俗信仰を成立宗教との対比で捉えることも重要である。成立宗教の基本要件には教義・儀軌があり、これに外れるものに抑制や軌道修正が働くのに対し、民俗信仰には伝承する集団内に規制はあるものの明確な教義・儀軌に当たるものはなく、状況に応じて変化・変容を遂げるのは避けられないといえる。仏教（仏

教といっても多様であるが）と民俗信仰の接触・交渉の場合でみれば、仏教が人びとの社会生活の中に定着するには民俗信仰と何らかの折り合いをつける必要がある、仏教の民俗信仰化や民俗信仰の仏教化の両側面が進むこととなった。そして、そのことは仏教や民俗信仰を多様化させ、活性化させることになったとみられる。民俗信仰は、普遍的な価値観を志向する仏教と接触・交渉をもつことで、人びとの神観念・靈魂観・世界観・自然観・人生観などに新たな意味づけがなされ、むしろ根強い命脈を保持することができたのではないだろうか。

著者の坂本氏は、「仏教民俗」を独自の体系をもつものと捉えており、その中でも「民間念仏」を最も重視している。本書は、日本社会における「民間念仏信仰」の重要性とその広がりや十分を示しており、仏教と民俗信仰の接触・交渉の究明に大きな示唆を与えてくれる研究といえる。本書の綿密な調査に裏付けられた研究は、仏教民俗や民俗芸能の研究にとどまらず、日本の宗教史や仏教史の研究においても広く参照されていくものと思われる。

（法蔵館、二〇一九年一〇月刊、八六〇頁、一七〇〇円十税）

## 〈注〉

- (1) 坂本要「仏教民俗研究会」前後、『佛教經濟研究』第四八号、駒澤大学仏教經濟研究所、二〇一九年、四九頁)
- (2) 坂本要「日本的仏教と仏教民俗」『歴史手帖』第一四卷第一〇号、名著出版、一九八六年、三五〜四二頁)
- (3) 同右、三九頁
- (4) 坂本要「日本的仏教の三円構造」『宗教民俗研究』第一八号、日本宗教学会、二〇〇八年、二三〜二五頁)
- (5) 前掲(1)、五六頁
- (6) 仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究 資料編』隆文館、一九六六年、一〜二頁
- (7) 五来重氏の民間念仏信仰に関連した論著には、『民間芸能史』(五来重著作集第七卷、法蔵館、二〇〇八年)に収録された論考、『踊り念仏』(平凡社、一九八八年)などがある。
- (8) 谷口貢「民俗信仰研究の歩み」(宮本袈裟雄・谷口貢編『日本の民俗信仰』八千代出版、二〇〇九年、九〜二四頁)